

スターリンは諸悪の根源か ——マルクス型社会主義とスターリン型社会主義——

鈴木重靖

1. スターリンは諸悪の根源か？——2つの問——

ソ連・東欧の社会主義体制の崩壊に関連して次のような主張ないし見解がある。ソ連・東欧が崩壊した究極の原因は、世界最初の社会主義国であるソ連の社会主義経済の建設者がスターリンだったということにある。スターリンが、多くの反対者を銃殺・投獄・流刑・追放などの手段によって肅清し、ソ連に最初の中央集権的官僚的指令経済であるいわゆるスターリン型社会主義経済をつくり、これが20世紀の後半まで根本的に修正されることなしに続いたからこそソ連・東欧の社会主義経済は崩壊したのだというのである。だからもしスターリンがいなかったら、事態は根本的に変わったであろうし、ソ連・東欧の歴史的悲劇も生じなかったはずである。つまり諸悪の根源はスターリンにあるというわけである。

この種の主張ないし見解はマルクスやレーニンの社会主義論を信奉している人々の間に、それを明言しているいないにかかわらず、多かれ少なかれ見られるものである。しかしこの種の主張ないし見解は正しいであろうか。わたしはこの問を次のような2つの問におきかえて答えてみたいと思う。

第一の問：もしかっのソ連をスターリンが支配していなかったとしたら、ソ連の社会主義経済は全く違ったものになったであろうか、それともたとえスターリンがいなかったとしても、第二、第三のスターリンあるいは小スターリンがあらわれて、結局ソ連の社会主義経済は同じようなもの

つまりスターリン型のそれとなったであろうか。もし後者だとしたらそれは何故であろうか。

第二の間：マルクスの社会主義観つまりマルクス型社会主義とスターリン型社会主義とは根本的に異なるものでであろうか、それとも同種のものあるいは本質的に同じものでであろうか。

一見すると、これらの間、なかんずく第一の間は社会科学における問として必ずしも適切なものではないようにみえる。何故ならこれは「もしクレオパトラの鼻がもう少し低かったならば、世界の歴史は変わったかもしれない」という言葉を何か思いださせるからである。つまり過去の歴史的事実に対して「もし」という仮定を勝手に挿入して、これを書き換えるようにみえるからである。

確かにこの種の危険性はないではないが、しかし歴史的事実それ自身を問題にするのではなくて、歴史的事実に対応して考えられうる論理性を問題とするものであるならば、このような問も決して無意味なものとはならないであろう。

さてこのような前置きをしてから、第一の間に対する答えから述べてみたい。

2. テロリズムの正当化

もしスターリンがいなければソ連の社会主義体制が根本的に変わったであろう——たとえば民主的で自由なそれに——という想定が正しいとするならば、彼個人に対するテロリズムを必ずしも否定できなくなる。ロシア革命は武装蜂起によって遂行されたものである。人命殺傷を完全に避けようとしたならば、この革命は行なわれなかったであろう。暴力革命を否定せず、同時に個人（若干の取り巻き連を含んでもよいが）によって歴史や体制が根本的に変わりうるという見解は、それを表面上支持するしないにかかわらず、テロリズムを正当化する見解に通ずるものである。何故ならテロリズムとはある個人がいなくなるかあるいは少なくとも人間として活

動不能のような状態になることによって歴史が変わりうるという考えにもとずいて、この個人に対して何らかの暴力行為を実行するまいししようとするのであるからである。しかし理性ある人々はテロリズムの無意味なことを知っている。単に人道的な観点からだけでなく、歴史的観点からしてもそうなのである。

革命前のロシアにおける皇帝や貴族に対する「人民の意志」(ナロードナヤ・ウォーリヤ)党などによるテロリズムが決してツアーの体制を倒せなかったということ(レーニンたちはこの失敗に学んで大衆の蜂起によるロシア革命を行なったのである)、またわが国でも維新前後に多くの志士や政治家が暗殺されたが、これによって徳川封建体制の崩壊は阻止されなかったということは周知のことである。この他にもこの種の例はいくらでも挙げられるが、要するに、体制を云々できないような遠い昔とか、体制のはっきりしない混乱期とかいうような特殊の時代を除いては、一見かに個人の力が強そうにみえても、その個人によって体制や歴史が造られたり破壊されたりするのではなくして、体制や歴史がそれに対応した人物を登場させ、あるいはこういう人物をつくりあげるのである。少なくとも長期的にみるならばそうであろうし、20世紀にもなれば一層そうであろう。

だから、後進資本主義国たるロシアにおいてこの国をマルクス・レーニン主義という名の経済政策および経済制度によって資本蓄積・工業化・労働者階級の創出等を推進しようとする道を歩み出した以上、この過程でスターリンを含め指導者の一人や二人が何らかの理由でいなくなり、その顔ぶれが変わったとしてもソ連の体制自体に根本的变化が生じたであろうとは考えられないのである。

3. 第二、第三のスターリン

少なくともスターリンの死後、旧ソ連の指導者たちの多くは悪いのはスターリンだったと考えていた。つまりスターリン悪玉論が横行していた。その最初の公然たる非難者フルシチョフがそうであったし、ブレジネフも

そうであった。フルシチョフはスターリンが死んだ以上、ソ連は最も進んだ資本主義国たるアメリカよりもずっと民主的で経済水準の高い社会主義国になるであろうと考えていた。彼は、無人および有人の人工衛星をアメリカに先駆けて宇宙に打ち上げたという実績を背景として、20年間の長期経済展望計画を発表し、この中で1970年にはソ連は1人当たり工業生産高でアメリカに追い付き、1980年には全般的経済水準においてアメリカを遙かに追い抜くであろうと予想している。

ブレジネフはさすがにフルシチョフほど楽観的ではなかったが、彼もまた、少なくともその政権の前半までは、コスイギンとともに経済改革によってスターリン時代からのソ連経済の失敗を克服できるものと考えていた。

だが、フルシチョフにせよブレジネフにせよスターリン的指令経済の欠陥を克服できず、結局、彼らはそれを継承していったのである。ブレジネフに至ってはむしろスターリンの在命中よりも指令経済のもつ欠陥を拡大した形で継承しているのである。スターリン時代からの積年の指令経済のもつ矛盾が経済機構の複雑化などと絡んで増幅して現われたからである。

この意味で彼らはスターリンを悪玉として非難しているにかかわらず、彼ら自身第二、第三のスターリンなのである。その証拠にブレジネフなどは、スターリン悪玉論をあまり続けていると自分たちがその権力の基盤としている指令経済つまりスターリン型社会主義経済そのものが崩壊し、いつかは、「お前たちだって結局スターリンと同類ではないか」といわれることを恐れて、後になってスターリン悪玉論を事実上引っ込めている。

なるほど彼らはスターリンほど冷酷で大規模な粛清や弾圧を行なわなかったかもしれない。しかしこれも彼らの時代には既に共産党の支配体制が強固にかつ長期に続き、ソ連社会がそれなりに安定していたため、特に大規模な粛清や弾圧を必要としなかったということもあったのかもしれない。このような差違はあったとしても、フルシチョフやブレジネフの時代でも、国民に対する独裁政治はなくなっておらず、思想・信仰・言論の自由もなく、共産党に対する批判もタブーであり、またこれまでのスターリ

ン型中央集権的指令経済も存続しているのである。その体制の性格において、スターリン時代とたとえ若干の相違はあるにしても、基本的には変わっていないのである。

ゴルバチョフですらも基本的にフルシチョフやブレジネフのスターリン観と変わっていない。彼もスターリン（やブレジネフ）のような誤った政治家がいたからソ連が悪くなったのであって、レーニンの意志を正しく継いだ自分ならばこの国を民主的で自由な社会主義社会につくりかえることができる^(注1)と考えていた。彼はこの手段としていわゆるペレストロイカとグラスノスチというキャンペーンを展開したのである。しかしこの彼の考えが誤りであったことは、その後のソ連社会主義体制の崩壊という歴史的事実によって証明されたのである。つまりどのような能力や性格をもった人物が指導者として登場しようと、ソ連を社会主義体制として残したままでこれを変えることはできないということである。いいかえれば、ソ連の社会主義体制はそれ自身の歴史法則によって動いているのであって、個人の方ではどうにもならないということである。ゴルバチョフは新たな顔をしたソ連社会主義社会の指導者になろうとしたけれども、つまり何代目かの善良なスターリンになろうとしたけれども、なれなかったのである。これは彼の責任というよりもソ連社会主義体制の責任^(注2)なのである。

(注1) M・ゴルバチョフ、「ペレストロイカ」、田中直毅訳、講談社、1987年、28～30ページ。

(注2) この論文では一般の用語にしたがって「社会主義体制」という言葉を使ったが、わたくしが他の個所で述べたように、体制としてはソ連は実質的には初期資本主義あるいは封建制度から資本主義制度への過渡期にある国家資本主義と呼んでもいいような体制であり、社会主義とは単にそのうわべの装い——歴史的段階としての体制とは区別されたせいぜい一種の過渡的的制度——に過ぎないものである。またソ連で実際に行なわれてきた社会主義政策は実質的には20世紀型重商主義という一種の重商主義政策ないしそれに近い政策である。

以下何回か「体制」という言葉が出てくるけれども、同じこの言葉でも内

容的には必ずしも同一のことを意味するとは限らないことを、読者は前後の文脈において正しく理解するようお願いしたい。なおこれについては拙稿、「社会主義は経済体制か」、広島経済大学経済研究論集、第14巻、第3号、1991年9月および「一老学者の社会主義問答」、日ソ経済調査資料、No. 723、1992年8月号、2～10ページを参照のこと。

4. 小スターリンたち

スターリンと事実上同種の役割を果たしてきたのは、なにもソ連のスターリンの後継者たちばかりではない。東欧やその他のいわゆる共産圏と呼ばれてきたあるいはいまでも呼ばれている社会主義国の指導者の多くもそうなのである。彼らはいわば小スターリンとでも呼ばれるべき人たちである。彼らも、一部ソ連に抵抗した指導者——ハンガリーやチェコスロバキアやポーランドなどにおいて一時期みられた——を除けば、大体においてスターリンと同様に政治的には独裁体制を敷き、社会的には思想や言論の統制を行ない、経済的には中央集権的指令経済政策を実施したのである。

なるほど、彼らの小スターリン的行動は当時のソ連からの圧力によって止むをえずしたものであるという面がないわけではない。しかしこのことを考慮したとしても、客観的には彼らが自国に対してだけではなく、さらにソ連に対してもスターリン型社会主義体制を維持あるいは強化するという二重の役割を果たしたということはこれを否定できないのである。

しかしすべての小スターリンがソ連の圧力に押されてスターリンのような行動をとりあるいはスターリン的役割を果たしたわけではない。ソ連から独立しあるいはソ連に抵抗しながらなお且つ自らスターリンと同じような行動をとった者たちがかなりいるのである。アルバニアのホッジヤとかルーマニアのチャウシェスクなどがその好例であろうが、そのほかにも名を挙げようとすれば何人も挙げることができる。

これまで述べてきたことから分かるように、スターリンがたとえいなかったとしても、マルクス・レーニン主義にもとづく政党が権力を握って

いるいわゆる社会主義国では、いつでもまたどこでも彼に代わる人物が現われて、彼が果たしたような歴史的役割を果たすようになるのである。このことはスターリンがスターリン型つまりソ連（型）の社会主義体制をつくったのではなくて、ソ連（型）の社会主義体制がスターリンをつくったということ物語るものである。より正確にいうならば、20世紀初頭のロシアのような、また第二次大戦後の東欧やアジアのような遅れた経済の国々において、それぞれの経済体制——資本主義の段階に入っている国もあるしそれ以前の段階の国もあるが——に対応して、マルクス・レーニン主義による社会主義という一種の強度の統制経済政策が行なわれ、そしてその政策と結びついた制度ができるならば、何人でもスターリン——スターリン本人、第二、第三のスターリンおよび多くの小スターリン——は生まれるということである。

5. ゼロ番目のスターリン

スターリンについていえたことはレーニンについてはいえないであろうか。勿論そういうことはない。レーニンといえども例外ではありえない。もしレーニンという個人がソ連の社会主義体制をつくったとするならば、レーニンがいなくなれば——彼はいつかは必ずなくなるのである——、他の人物がまた、その人物の頭脳の中から生み出された思考と好みに従って、彼なりの社会主義体制を作るのである。それはスターリンかもしれないしトロツキーかもしれないしあるいはジノヴィエフかもしれないが、その人物にしたがって、スターリン型社会主義となり、またトロツキー型社会主義となり、あるいはジノヴィエフ型社会主義となるのである。

彼らは、あるいは権力維持のために、スターリンがそうであったように、レーニンの忠実な弟子として、レーニン型社会主義の継承者をもって自分たちを任ずるかもしれない。しかしこれは表向きのものであって、彼らはそれぞれ違った体制をつくることになるのである。このことはスターリンを諸悪の根源とみなして、彼を否定するレーニン信奉者が特に強調すると

ころである。

このようにもしそれぞれの指導者個人によって体制ができるとするならば、その個人の数だけ違った体制ができることになるのである。これほど不安定な体制はない。レーニンは天才かもしれないが、彼がいなくなれば、彼のつくった体制もいつかはなくなるであろう。むしろ彼が天才であればあるほど、引き継いだ者にとって、彼のつくった体制を維持することは困難になるであろう。何故ならこの体制はレーニンのような天才だからこそつくられもし、また維持されもしたのだから。

だからレーニンがつくったのは体制——歴史的発展段階としての経済体制——ではない。彼は、すでに存在している体制——ロシアという遅れた資本主義体制——の上に、当時の内外の諸条件に規定されながらもそれを彼なりに考慮しながら、その体制に対応した制度をつくろうとしたに過ぎない。この点にかんしては彼もまたスターリンその他のソ連の指導者たちと同じなのである。つまり体制がレーニンを生んだのであって、その反対ではないということである。

レーニンも結局は時代の子であって、彼が当時の内外情勢のもとでロシアという遅れた資本主義国を時間をかけずに先進国なみの近代工業をもった国にしようとするれば、多かれ少なかれ中央集権的な統制経済政策ないし指令経済政策を採用せざるをえなかったであろう。これを彼はマルクス主義者として社会主義計画経済という装いをもって実行しようとしたのである。^(註3)この点では彼もスターリンやブレジネフやその他上述の小スターリンたちと大同小異の歴史的役割——ただしその先鋒として——を演じたものと思われる。この意味でレーニンはスターリンの前のスターリン、いわばゼロ番目のスターリンといえることができる。

もしレーニンがマルクスが考えていたように資本主義よりも自由で民主的な社会主義社会を作ろうとして実際にそのような政策を実施したとするならば——恐らくこういうことはなかったと思われるが——、彼もまたゴルバチョフと同じ運命を辿ったであろう。つまりこの場合にはレーニンは

社会主義者であることをやめるか、そうでなければ権力の座から締め出され、その結果ロシアは社会主義の道ではなく名実ともに資本主義の道を歩んでいったであろう。ただしイギリスやアメリカのような先進資本主義型の道ではなく、日本やドイツのような後発資本主義型の道——おそらく当分は国家主導型で——を歩んでいったであろう。

以上述べたことから第一の問に対する答えは自ずからあきらかであろう。たとえスターリンがいなくても、ソ連は勿論のことその他の国でも、またいつでも、マルクス・レーニン主義政党の主導する社会主義国ならば、第二、第三のスターリンや多くの小スターリンたちがあらわれ、多かれ少なかれ独裁政治が行なわれ、中央集権的指令経済政策が実施されるであろうということである。これについてはレーニンですらも例外ではないのである。

(注3) レーニンもスターリンに劣らず国家集中型の指令経済を考えていたであろうことは次の言述からも容易に推察される。彼はいっている、「共産主義社会の第一段階……ここでは、すべての市民は、武装した労働者である国家に雇われる勤務員に転化する。すべての市民が、一つの全人民的な国家的『シンジケート』の勤務員および労働者になる」(「国家と革命」、レーニン全集、第25巻、大月書店、1957年、511ページ)、「社会全体が、平等に労働し、平等に賃金を受けとる一事務所、一工場となるであろう。」、同上、512ページ)。

レーニンは革命後、実際にはかなりこの見解とは異なる政策をとらざるをえなくなっているが、しかし彼の考えが基本的に変わったという証拠はない。

6. マルクスの夢

スターリンがいようとまいと、マルクス・レーニン主義政党の主導する社会主義社会ならば、どこでもいつでもスターリン型社会主義社会になる、この点についてはレーニンが指導者になっても同じだといったが、それでは、彼らの思想的祖マルクスについてはどうであろうか。

マルクスの描いた社会主義像が少なくとも次の点で旧ソ連や旧東欧諸国

また現存の社会主義国の現実と程遠いものであったことは否めないであろう。マルクスが考えていた社会主義社会とは資本主義社会よりもはるかに豊かで自由な社会であるはずなのに、これらの国の社会主義社会は資本主義社会よりもはるかに貧しくて不自由な社会であった又あるということである。マルクスは共産主義社会について、「各人の十分な自由な発展を根本原理とするより高い社会形態」^(注4)、「各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件であるような協同社会が現われる」^(注5)、「(この社会において)自己目的として認められる人間の力の発展が、真の自由の国が、始まる」^(注6)などと書き、共産主義社会では人間の自由は完全に開花する旨述べている。

マルクスによれば社会主義社会は共産主義社会の初期の段階ではあるが、資本主義社会の後にくる社会であり、したがって社会主義社会は共産主義社会ほどではないとしても、資本主義社会よりは民主的で自由な社会であるはずである。しかし今日までの現存しあるいはかつて存在した（しばしば共産主義国と呼ばれているところの）社会主義国では自由や民主主義が極めて乏しいだけでなく、資本主義国のそれよりもはるかに劣っていることは殆ど疑う余地のないところである。

マルクスが描いた高度に豊かで自由な共産主義社会とそれに到達するまでの道程としての社会主義社会が、いかに科学的装いをもって実現可能なようにみえ、またそれがいかに多くの人々を魅了したとしても、所詮はこの社会は彼の単なる夢であり願望に過ぎず、現実はむしろそれとは正反対の欠乏と不自由の社会であったということは、今日ではもはや何人も否定できない事実となっている。

(注4) 資本論、第3巻、第7篇、マル・エン全集、第23巻、大月書店、1991年、771ページ。

(注5) 共産党宣言、マル・エン全集、第4巻、496ページ。

(注6) 資本論、第3巻、第7篇、マル・エン全集、第25巻、1051ページ。

7. マルクス型社会主義とスターリン型社会主義

もしマルクスがレーニンやスターリンに代わって社会主義社会の建設に携わったとしたらどうであろう。そこで形成されたマルクス型社会主義はスターリン型社会主義とは根本的に異なったものになったであろうか、それとも同じようなものになったであろうか。

マルクスの社会主義経済論は必ずしも完成されたものではなく、いくつか不明確な点はあるが^(注7)、しかしほぼ次のように要約できる。

第一に、生産物は、生産財消費財を問わず、商品であることを止めること。マルクスはいう「生産物のすべてが、また単にその多数だけでも、商品という形態をとるのは、……それは、ただ、まったく独自の生産様式である資本主義的生産様式の基礎の上だけで起きる^(注8)」と。つまり、資本主義は最後の商品経済・市場経済であって、社会主義では原則的にあらゆる財に関して市場は存在しないのである。

第二に、搾取階級たる資本家階級がないこと。マルクスによれば、社会主義革命とは資本家階級に代わって労働者階級が権力を握り、資本家による搾取のない労働者階級の指導する勤労者の社会を建設しようとする革命であるから、当然のことながらこの革命によってできた社会主義社会には資本家階級はいないことになる。別言すれば、資本家階級が存在している間はまだ名実ともに備わった社会主義社会にはなっていないということである。

第三に、投資は社会が行なうということ。マルクスによれば、資本家とは、収益（剰余価値）を目的として投資する者であり、そして彼の下で働く労働者を搾取する者である。したがって社会主義社会では個人的投資家となること——たとえば株主になること——は許されない。投資をする者はここでは社会でなければならない。しかるにこの社会は労働者階級が指導する社会であるから、投資のための社会組織も労働者階級が指導するあるいは労働者階級を代表する組織でなければならない。つまり労働者階級

が直接あるいは代表者を通して権力を握っている国家ないし管理している機関でなければならない。

第四に、経済は計画的に管理・運営されるということ。マルクスは書いている、社会主義社会では、「社会的な生活過程の、すなわち物質的生産過程の姿は……人間の意識的計画的な制御のもとにおかれる」^(注9)、「社会の労働時間にたいする社会の直接的意識的支配」^(注10)、「社会の資本主義的形態が廃止されて社会が意識的な計画的な結合体として組織されている」^(注11)と。

ここでいう社会の意識的・計画的制御とか支配とかいうのは、その社会の部分的な地域とか或るいくつかの産業部門に対するそれではない。マルクスは書いている、「農業、鉱業、製造業、一言でいえばすべての生産部門は、しだいに最も効果的な形態に組織されていくであろう。生産手段の国民的集中は、合理的な共同計画に従って意識的に行動する、自由で平等な生産者たちの諸協同組合からなる一社会の国民的基礎となるであろう」^(注12)。

社会の生産単位が協同組合であれ何であれ、いずれにしても市場は存在しないのだから、その社会での生産は個々の独立した生産組織ないし企業ではなく、社会の意志によって組織的・計画的に管理・運営されなければならない。投資も社会——具体的には国家——が行ない、すべての生産部門は勿論のこと、物流部門さらには消費までもがその社会（国家）の管理下におかれなければならない。何故なら経済とはマルクス自身が指摘しているように生産から消費にいたるまで「全体として連結」^(注13)しているものであり、それぞれの生産部門も互いに網の目のように結びついているからである。したがって、基本的な生産手段はすべて社会（国家）へ集中しなければならない。つまり国有化されるか国家の完全な管理下におかれなければならない。

作成された経済計画ができるだけそのままの形で遂行されるためには、関係する上部組織から下部組織にいたるまでのすべての者が、つまり国の計画の担当者から工場や職場における一人一人の労働者にいたるまでのすべての者が、計画者の意志に従って行動することが必要である。だから、

経済計画はこれを実行しようとするれば、上位下達という形態つまり行政的指令的性格をもたざるをえないのである。人はしばしばスターリン型社会主義経済を行政的指令経済といて非難するけれども、あらゆる経済政策は多少とも行政的指令的性格をもつのであって、まして経済計画を徹底して行なおうとするれば、それは当然中央集権的な行政的指令的性格を強くもつようになるのである。ここでは基本的について経済的民主主義も行政的民主主義も許されないのである。マルクスの志向した社会主義的計画経済もこのような性格をもたざるをえないのである。

以上4つの条件を備えた経済制度、つまり市場は存在せず、資本家や資本家的企業家という搾取階級のいないところの、労働者階級が指導する国家（機関）が投資を行ない、計画にしたがって国営のないし国によって完全にコントロールされているところの工場や事業所が生産等を担当するところの中央集権的な行政的指令的性格をもった経済制度、これがマルクス型社会主義の経済制度というものである。一見してわかるように、これはまさにスターリン型社会主義のそれと同種あるいはそれ以上のものである。

(注7) これについては、拙稿「マルクスの社会主義論——資本主義論との関連において」、広島経済大学経済研究論集、第14巻、第2号、1991年6月、81～85ページ参照。

(注8) 資本論、第1巻、第2篇、マル・エン全集、第23巻、222ページ。

(注9) 資本論、第1巻、第1篇、マル・エン全集、第23巻、106ページ。

(注10) 「マルクスからエンゲルス（在マンチェスター）への手紙、ロンドン、1868年1月8日」、マル・エン全集、第32巻、11ページ。

(注11) 資本論、第3巻、第6篇、マル・エン全集、第25巻、852ページ。

(注12) マルクス、「土地の国有化について（1872年）」、マル・エン全集、第18巻、55ページ。

(注13) マルクス、「経済学批判への序説」、マル・エン全集、第13巻、617ページ。

8. マルクス型社会主義と自由——その1

マルクスの考えた社会主義もスターリンによって始められた社会主義と同様にこれを実現しようとすれば、中央集権的な指令経済に成らざるをえないということを述べたが、しからばこのスターリン型の経済が民主主義も自由もない暴政と結び付いたと同様に、マルクスの社会主義経済も必然的に民主主義も自由もない暴政の横行する社会を生み出すようになるのであろうか。M&R・フリードマンがいうように、経済的自由のないところ政治的自由や社会的自由もなくなるのであろうか。^(註14)一言でいえば、マルクス型社会主義は経済の側面だけではなく政治や文化その他人間生活全般において、スターリン型社会主義と共通しているのであろうか。これについて考えてみたい。

一般に独裁政治や暴政が横行しているような国は、一方で多くの一般大衆が貧困で苦しんでいるのに、他方でごく少数のものが富やその他の特権を欲しいままにしている国であって、経済の立ち遅れた国でしばしば見られるものである。

これまでこの地球上に存在したマルクス・レーニン主義にもとづくスターリン型の社会主義の国々のうちには、国の工業化にはある程度成功した国もあるけれども、一般大衆の生活の向上にも成功したという国はきわめて少ない。社会主義先進国であった旧ソ連はその典型といってよい。この国では、その初期において工業化に一定の成果はあったものの、その後ごく一部の工業技術は別として、工業の発展もあまり芳しくなく、国民大多数の生活状態にいたっては、資本主義国に較べて極めて劣悪であった。

この理由は多々あるけれども、基本的にはこれらの社会主義国の経済が市場経済に基ざいたものではないということにある。このためこれらの国では、財なかんずく消費財の需要の状態を正確に把握することができず、したがってこれらの財の生産やサービスの供給またその分配が諮意的となり、国民経済の各分野の安定した均衡をとることが極めて困難になるので

ある。特に原料から最終加工に至るまでの産業連関的工程の長いものやその複雑なものまた外国に原料や部品の多くを依存するものにおいてそうである。消費財とくに高級消費財にはこの種のものがかなりあると考えられる。

一般国民の消費財やサービスに対する需要についてはどんな精密な経済計画をもってしても、これを正確に掴むことは困難である。このことは旧ソ連において、たとえ統制された形とはいえ、消費財に関しては殆ど百パーセント市場に依存せざるをえなかったという事実からもうかがわれる。

ソ連経済の消費財の欠乏からくるソ連国民の生活水準の低さとソ連の官僚制との結び付きについて、トロツキーは次のようにいっている「商品が少なければ買い手は行列に並ばざるをえない。行列がひどく長ければ秩序を保つために警官を立たせておかなければならない。これがソヴェト官僚制の権力の出発点である。^(注15)」。

マルクス型社会主義は商品経済の（発展的）否定を前提としており、さらに共産主義の段階に至れば商品経済の基礎となっている分業それ自体もなくなることを見透しているという点で、スターリン型社会主義よりもさらに徹底した市場排除型社会主義経済である。^(注16)マルクス型社会主義がソ連で実現されたとしても恐らく消費財をはじめとする財一般の不足状態はなくなるであろうし、国民の低い生活水準も解消されないであろう。したがって強固な官僚制も残るであろう。つまり官僚主義という点でマルクス型社会主義とスターリン型社会主義とは共通しているのである。

(注14) M & R・Friedman, "Free to Choose, A personal Statement", Penguin Books, 1981, p. 91. (西山千明訳, M&R・フリードマン, 「選択の自由」, 日本経済新聞社, 1981年, 110ページ。

(注15) トロツキー, 「裏切られた革命」, 藤井一行訳, 岩波文庫, 1992年, 147ページ。

(注16) たとえばマルクスは次のようにいっている。「分業を止揚する共産主義革命」(「ドイツ・イデオロギー」, マル・エン全集, 第3巻, 407ページ)ま

た「共産主義社会のより高い段階で、すなわち個人が分業に奴隸的に従属することがなくなり」（「ゴータ綱領批判」，マル・エン全集，第19巻，21ページ）。

エンゲルスも次のようにいっている。「階級の存在は分業からくるのだが、（新しい社会秩序では）これまでの様式の分業は、まったくなくなってしまおう」（「共産主義の原理」，マル・エン全集，第4巻，392ページ）。

9. マルクス型社会主義と自由——その2

マルクスが第一インターで社会主義運動の在り方についてバクーニンと対立したことは有名であるが、この例からもわかるように、イデオロギーが実践的運動と結びついたとき、対立するイデオロギー間に強い排他性が生まれ、この排他性は権力獲得闘争と関連するようにでもなれば、一層激しいものになるということは多くの歴史的事実が証明している。

イデオロギーは宗教と似て他派に対して多かれ少なかれ排他性をもつものであるが、それでもこれが比較的他派に寛容な性格のものであるとか、またたとえかなり排他的性格のものであるとしても、信念とか信仰とかまた理論上の次元にとどまっている間は他派を非難あるいは批判するけれども、他派との間に比較的平和的に共存することが可能である。つまり一方が東の道を主張し、他方が西の道を主張しても主張の段階では論争ですむことである。

しかし、ひとたびそれぞれが実際に自分たちの道を歩み始めたとき、論争だけではすまなくなり、権力が目の前に見えるようになれば、相手を強く排除しようとしはじめるのである。この種の事例は、フランス革命のときのジャコバン派とジロンド派の対立、ジャコバン派内部のロベスピエールとダントンの対立、またロシア革命のときのボリシェビキとメンシェビキの対立、ボリシェビキ内部のスターリンとトロツキーの対立などにみられるが、これらはすべて血生臭い排除闘争に終わっている。

同じ実践的対立や闘争でも互いに経済的利益を目的としたそれとか、殆どイデオロギー的対立のない政策上のその場合には、セカンド・ベスト

やサード・ベスト的な力が働いて互いに比較的妥協の可能性がある。しかしイデオロギー闘争の場合は神々の闘争にも似て非妥協的であって、多くの場合相手を抹殺しようとする力が働くのである。そのイデオロギー自体が排他性の強いものであればあるほどそうである。

マルクスのイデオロギーは極めて排他性の強いものである。このことは彼の多くの著作からもうかがわれる。これは一部は彼の性格からも来ているようにも思われるが、やはり主要な原因はそのイデオロギーが当時の支配体制たる資本主義を打倒するという内容のものであるからである。ましてこれが実践にうつされ、革命を通しての権力闘争ともなれば一層排他性の強いものとなる。^(註18)

マルクスの社会主義は市場に全く依拠しないいわば完全計画性経済の社会主義である。これを実行に移そうとすれば、すべての人々が一身体となり、恰も一人の人間が計画的に経済活動しているように一致団結しなければならない。ここでは us と them とか、 me と you とかいう区別は経済活動にかぎり許されないのである。すべての人々が共産主義という理想郷を建設するという一つの使命感をもつことを要求されるのである。大きなピラミッド型の計画経済の各石片は一つとして歪んだり脱落したりすることを許されず、上意下達に対する服従は絶対でなければならない。このことが緻密な経済計画をとどころりなく遂行するための条件である。

なるほどマルクスに従えばこのような命令と服従の関係は共産主義社会では自由人たちの自発的意志にもとづくものであるかもしれない。しかし、やや事例は悪いかもしれないが、上下関係の厳しい暴力団や盗賊団においても、その組員や団員になっている者たちは（たとえ全部とはいえないまでも）自発的意志によってそれに参加しているのであって、参加する者の動機がどうであれこれによってその対象となる組織の性格が変わるわけではないのである。

これまで述べてきたことからわかるように、マルクスがいかに膨大な

書物を書き、哲学や歴史学また経済学において多くの人々に影響を与えたとしても、またこれらを背景として彼が描いた社会主義や共産主義の社会がいかに人々を魅了する理想郷であったとしても、一旦この社会を誰かがつくろうとすれば、経済の面だけではなく、政治や文化その他の面においても結局スターリンがつくった（正確には指導した）スターリン型社会主義の社会にならざるをえないのである。一言でいえば、マルクス型社会主義とスターリン型社会主義とは殆ど社会生活のすべての面で共通しているのである。S・ブラギンスキーがいうように「その予言者（マルクス）のドグマをもとに社会をつくろうと思えば、こういう（スターリン・モデルの）社会しかつukれない」^(注19)のである。だからもし人がスターリンを諸悪の根源だというならば、マルクスこそまたそのルーツであるといわなければならない。これが第二の問に対する最終的な答えである。

(注17) E・H・カーはマルクスの性格について次のように書いている。「彼は、自分の意見が正当であることを知る、すと直ちに、自分と意見を異にする者は馬鹿か悪者である、と思った。彼は自分の仲間を多数を蹴飛ばし、かつ憎んだ」（「カール・マルクス」、石上良平訳、未来社、1956年、90ページ）。

(注18) 今日のわが国のマルクス主義者をはじめとして資本主義諸国のマルクス主義者が排他的ではなく、比較的寛容なのは彼らが実践から離れているからである。

(注19) S・ブラギンスキー、V・シュヴィドコー、「ソ連経済の歴史的転換はなるか」、講談社現代新書、1991年、140ページ。

10. おわりに

マルクス・レーニン主義にもとづく社会主義のあるところ、どこでもいつでも（大小さまざまな）スターリンがあらわれ、スターリン型の中央集権的指令経済と独裁政治の社会がつくりだされるということ、そしてまたマルクスの社会主義（マルクス型社会主義）もしたがってまたレーニンの社会主義（レーニン型社会主義）もこのスターリン型社会主義と同種のも

のあるいは本質的に同じものであると述べてきたが、しかしだからといって、私はかつてのソ連の歴史的役割やマルクスの思想的意義のすべてを否定するつもりはない。

ソ連の歴史的役割がどういうものであったかということについては、これから歴史学や経済学が時間をかけて検討すべき問題であって、いまここで安易に結論をだすべきものではない。しかし、ソ連の存在が全く歴史の歯車を逆行させるだけのもの、あるいは歴史の悪夢であったと判断することには疑義がある。例えば、第二次世界大戦においてソ連——スターリンが良きにつけ悪きにつけ指導者であったのだが——が反ファッズム陣営の勝利に一定の貢献をしたことは否定できないであろうし、植民地の解放運動や反帝国主義の民族運動に果たした役割もこれを完全に無視することは誤りであろう（たとえすべてがプラスの役割であったとはいえないとしても）。

マルクスの思想についていえば、なるほど彼の考えた社会主義社会をこの地上でつくろうとすれば、スターリン型の社会になるとしても、彼の思想がこれまで人類に与えてきたプラスの面までこれを無視することは正しくないであろう。いろいろの解釈があるかもしれないが、公平にみて、もし彼の思想がなかったなら、資本主義国の労働運動はずっと弱かったであろうし、労働者や勤労者の地位——賃金や労働時間や職場の環境など——の向上も遅れたであろうし、資本家や富裕者の横暴ももっと強かったかもしれないし、各種の社会保障政策も今日ほど発展しなかったかもしれない。逆説的に聞こえるかもしれないが、資本主義が比較的健全な発展を遂げたのもマルクスの思想とそれと結び付く各種の資本主義批判思想や運動があったからであるといえないこともない。

マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリンによって形成された社会主義がいかに重大な欠陥をもつものであったとしても、このことによって資本主義のもつ欠陥や問題が免罪になるわけではない。私は、今日ソ連・東欧の社会主義経済の崩壊を契機として、資本主義の欠陥に対する批判が

弱まり、貧富の格差の拡大や富者の傲の増大、社会福祉政策の減退、労働運動の停滞、強大国の弱小国に対する力の政策の行使、少数民族に対する多数民族の横暴等、一般に社会的に弱い立場にある人々を擁護する力が弱まることを危惧するものであるが、このような時にこそわれわれは、マルクスたちに対する批判は批判として、マルクスたちによって育てられてきたわれわれの資本主義の欠陥や問題に対する批判の目だけはこれを捨て去らないようにしたいものである。

（注20）ブレジンスキーは次のようにいっている。「ヒトラーのナチス・ドイツと、スターリンのソビエト・ロシアは、のちに大規模な戦争を展開するが、これが共通の信念を持つ者同士の兄弟殺しの戦争だったことを多くの人は忘れていいる。」（「大いなる失敗—20世紀における共産主義の誕生と終焉」、伊藤憲一訳、飛鳥新社、1990年、15ページ）

このような観点に立てば、第二次世界大戦における独ソ戦争は連合国側にとっては「毒をもって毒を制す」といった性格のものとなる。たとえこのような解釈が可能だとしても、ソ連が第二次世界大戦において連合国側の勝利に貢献し、またこの戦争を終結させることにおいて一定の役割を演じたという歴史的事実だけは否定できないであろう。

またナチス・ドイツとソビエト・ロシアには、共通点はあるとしても、ブレジンスキーのいうようにその点だけを強調して両者を性格的に同一のものとみるのは問題であろう。